

松蔭 校長室だより

—校長から保護者の皆さまへのメッセージです—

2019年6月1日 発行

松蔭中学校・高等学校

校長 浅井直光

あなたの平和の器（うつわ）にしてください。主よ、わたしをあなたの平和の器に。（聖歌 417 番より）

「平和は、後（あと）からついてくる」

令和となり 1 か月が経ちました。ようやく平成の終わりを実感しつつ、新時代の清新な空気を味わっているところです。2 学期に予定している中学 3 年生の修学旅行では、典拠となった『万葉集』「梅花の歌」の舞台、古代大宰府（だざいふ）の政庁跡を車中から眺め、太宰府天満宮にも立ち寄ります。古典や伝統文化の知識が、教室外でも深まることを期待しています。

私事ですが、大学で専攻した日本中世史（平安時代後半から鎌倉、室町時代）の専門科目に古文書学（こもんじょがく）という授業があり、新元号発表の瞬間、私は中世での理解の仕方を思い浮かべたのでした。当時の貴族や武家社会の史料では「令」は使役の意味を表わし、文書に「令和」とあれば「和せしむ」と読むこととなります。人々に「和」を強制する、つまり「平和を強いる」と理解するのが普通だったのです。歴史学者が、同様のコメントを発表していたので、私の第一印象は、あながち間違いではなかったようです。

歴史を振り返ると、権力者が「平和」を命令したという事例があります。豊臣秀吉は、太閤検地や刀狩令で有名ですが、彼が発した「惣無事令（そうぶじれい）」がその命令です。一般に「豊臣平和令」と称され、織田信長の後継者として、天下統一を目指した秀吉は、戦国大名に「平和」を命じ、軍事力を使用する争いを禁じたのです。この命令を無視したり、従わなかった大名に対しては、数十万の軍勢を率いて戦争を仕掛けました。秀吉はまず、土佐（とさ。現在の高知県）の長宗我部（ちょうそかべ）氏を服従させて四国を支配下におくと、「惣無事令」に反したという理由で、九州、薩摩（さつま。現在の鹿児島県）の島津氏を攻めて屈服させ、続いて関東地方のほぼ全域を領国として支配していた北条（ほうじょう）氏を攻め滅ぼしました。秀吉にとっての「平和」は、大名が自分に従属することであり、戦争を起こす理由にもなりました。近代の歴史では、自国の領土や国家、国民全体の利益を守ることが戦争の目的とされてきましたが、他国への侵略を正当化するため、一方的な主張が繰り返られることがありました。1937 年、北京郊外の盧溝橋（ろこうきょう）で軍事衝突（盧溝橋事件）が起こり、日中戦争が始まると、戦線は中国全土に拡大していきました。当時の軍部は、「暴支膺懲（ぼうしやうちょう）」をスローガンに掲げましたが、これは「暴虐な支那（シナ。当時の日本は中国をシナと呼んだ）を懲（こ）らしめる」という意味です。日本軍は悪いシナをやっつけるために戦争をしているのだと、国民に協力を訴えたのです。

戦争は、様々な理由付けをされながら繰り返し起こってきましたが、どのような事情があっても、その現実には、戦場で敵として向き合う兵士と巻き込まれた民間人の命の問題に他ならないよ

うに思います。命は最も大切な「持ち物」という言葉を聞いたことがあります。「平和」が、自らの命が尊重され、安心して自分の「持ち物」とできる状態を意味するならば、戦争と「平和」が同じ方向を向くことはありません。「平和」のための戦争や理由付けをした戦争は、戦場の現実を知る機会を持たず、歴史に学ばなかったことから、生まれるのではないのでしょうか。

中学 3 年の「総合的な学習の時間」では、「平和」をテーマとした学習を行っています。上述の北九州修学旅行では、被爆地長崎での平和資料館を訪問しますし、校内で広島での被爆者の方の講演も聴きます。幅広く戦争の実際を学び、学年末には自分の課題として「平和への提言」をまとめます。先月は、校内でミニフィールドワークを実施し、身近に残る戦争があった時代の痕跡をたどり、「平和」について考える機会を持ちました。校内で第 2 次世界大戦前後に撮影された写真を手にしながら生徒たちは、この辺りには食糧自給のための芋畑が、また、あの辺りには奉安殿（ほうあんでん）があった等々の説明受けました。正門から校内に入り、十字架を横目に進んで行くと、左手に運動場を下る階段があります。その上段の付近に、1941 年、奉安殿が建設されました。現在は、階段の配置に当時をうかがえるのみです。建物の内部には「御真影（当時の天皇、皇后の写真）」と「教育勅語（きょういくちよくご。1890 年、天皇の名で発布された国民道徳の基本と当時の学校教育の理念を記した文章の写し）」が納められていました。それらは、



<右端の建物が奉安殿（現在のバックネット付近から撮影）>

1945 年 6 月の空襲で校舎が焼失する前に、丹波篠山の篠山高等女学校（現在の篠山鳳鳴高等学校）へ預けられました（「松蔭女子学院百年史」）。その経緯は不明ですが、松蔭生が勤労奉仕で働いていた軍需工場の分工場が、学校に設けられていたことによると考えられます。

フィールドワークをする生徒に、未来の「ピースメーカー（平和を作る人）」の姿を重ねて見えます。近いところでも、遠いところに向けてでも、平和を確実にし、戦争を繰り返さないために自分ができることをやる力を、広い視野に立って蓄えているように感じるのです。イラクやシリアでの戦争被害を取材するフリージャーナリストが、次のように述べていました。軍隊や強い軍事力で平和を作るのではなく、日本のもともとの強みである食糧や医療の援助をしっかりとやり、政府が、紛争国の仲立ちに努めれば、「平和は、後からついてくる。」3 学期に書き上げる「平和への提言」を、楽しみに待ちたいと思います。子供たちが深く学び、考えるために道筋を作り、機会を設けることは、私たち大人の使命です。その使命を果たすことで、平和が後からついてくる世界が実現します。

今年度の PTA 役員の方々が決まりました

役員をお引き受けくださった皆様。紙面を借りて感謝申し上げます。また、お子様の入学でいただいた松蔭でのご縁です。親子で「松蔭ライフ」をお楽しみいただければ幸いです。（裏面に役員一覧）